

平成29年度第1回青梅市美術館運営委員会会議録

平成29年4月28日（金）

青梅市立美術館研修室

会議時間 14:00～15:30

出席者 委員6名、教育長

教育部長、事務局4名

1 開 会

2 教育長あいさつ

3 委員長あいさつ

4 報告事項

(1) 平成28年度青梅市立美術館事業結果について

ア 展示事業について

イ 普及事業について

ウ その他の事業について

エ 市民ギャラリー使用状況について

オ 入館者数について

カ 収蔵資料について

キ 広報、広告について

ク 施設整備について

事務局から説明

（了承）

(2) アンケート結果について

事務局から説明

（了承）

(3) その他

〔主な質疑・応答・意見〕

（委員）特別展、企画展の観覧者数が少ない印象。企画内容による差はなく、内容を把握して来館されているのか。広報・宣伝の効果が出ていないのではと感じるが、どうなのか。

自分たちが市民ギャラリーを借りて行った展示では1日あたり100人程度、5日で700人ほどになった。高名な画家でも案内状を送らなければほとんど入らない。通常の新聞等の周知だけでは、観に行こうという動機づけに対して弱いのではと感じる。

（事務局）広報については以前にもご意見があり、見直しを図っているところである。市のホームページを活用し、記事の作り方について

ても改善を進めていく。また、今年から市の公式ツイッターも始まるので、新たな方法として検討していきたい。

(委員) 入館者数のうち、市民と市外の内訳はどのくらいか？

(事務局) アンケート結果からみると、市民は36.4%となっている。来館者のうち無料の割合は高いが、小中学生を除けばその大部分は65歳以上の市民となっている。それ以外は、かんぼの宿の宿泊者が宿泊の前後で立ち寄る、その他、観光に来られた方、になると思われる。

(委員) 展示会は所蔵品が主で、特別展のように借用して行う機会は少なく、新たな作品に出会う可能性が低い。それが観覧者の減少につながっているのでは。

(事務局) 当館は当初より特別展の開催が少なく、近年では隔年での実施となっている。収蔵作品は増えず、施設の老朽化もあり、有料広告の予算は公募展もしくは特別展のみとなっている。企画の内容、施設整備等は予算の問題もあり、工夫だけで乗り切るには限界がある。

(委員) 老朽化というものはそれほど感じないが、規模としては中途半端なのは確か。地方の小さい美術館でも、目玉になる作品があれば活気がある。こちらの美術館は当初、小島善太郎作品を中心としていたが、近ごろ小島作品については日野の方に傾倒している。こちらでは展示の機会が減少し、公開がオーソドックでアピール力がない。冷遇されているのではといった印象もある。アンケートの中には、もっと小島作品を見たかったという声もあり、この美術館の目玉は小島善太郎だということも薄れているのではと感じる。

(事務局) 当館での小島善太郎の収蔵は50点ほど。企画展にあわせて展示替えを行い、市役所展示も含めれば、そのうち半数ほどを1年で展示している。その他作者の作品については、収蔵後公開されていないものを優先的に展示しているが、公開できていないものもある。小島作品が冷遇されているとは考えていない。

(委員) 来館者の中には、新しい出会いを求める方もいれば、いつ行ってもこの作家の作品が見られるということを望む方もいる。こちらは小島善太郎という冠をいただいた美術館であるから、常に5点ほどの作品が並んでいるということは大変意義のある運営方針だと思われる。

(事務局)平成27年度に比べれば平成28年度の来館者数は増えている。

今後も増やしていけるように検討していきたい。担当も工夫をして取り組んでいるので、長い目で見ていただけたらと思う。

(委員)小学校造形作品展について、資料の2ページでは観覧者数が3,434人、4ページでは1,934人となっているが、この違いは何か。

(事務局)2ページは2階を含めた展示会全体の数字、4ページは1階の市民ギャラリーのみの数字となっている。

(委員)これは、学校の先生が引率して来るのか。

(委員)作品が出品されると、児童・生徒本人はその父母やきょうだい、祖父母やご近所の方といった方と一緒に来ている。

(委員)青梅市民は現在何人くらいなのか。

(事務局)13万5千人程度となっている。

(委員)数年前に文科省と日博協が全国の美術館博物館等に行った調査によれば、市民の1割程度の来館者数があれば平均値だということになっている。青梅の場合は1万3千人程度となるので、あと3千人くらいは増えてほしいところ。

(委員)美術館の未来を考えたときに、敷居の高い美術館ではなかなか入ってこられない。小学校造形展では、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に来る子供や、友達の作品を見にくる子供がいた。子供たちとの距離を縮める方法、どうやったらできるのかを考えていく必要がある。それが入館者数の増や、館の未来につながっていくのではないか。

(事務局)大人だけでなく子供も来られるよう、美術館の活用について考えていきたい。

(委員)資料1の6ページにある修理修復について、修復する作品の選定や記録をどのようにされているか詳細を伺いたい。

(事務局)展示を行う際に作品の状態を確認し、修復の優先順位を決定している。近年は小島善太郎作品を中心に行っているが、年数の経過や自宅での保存により煙草のヤニ、虫等の付着物があり、洗浄、剥落部分の補彩と充填を行っている。作品によって修復にかかる時間は異なるため、毎回専門業者に作品を見てもらった上で見積もりをもらい、実施している。

今年は妹尾正彦の油彩1点、パステル画1点を行う予定。パステル画は2枚の紙がガムテープで留まっていたため、粘着部分

を剥がし、再度貼付する。油彩は剥落部分に油を充填、補彩する。6月中旬から作業を行い、3か月後に引き取る予定。修復の際は修復記録書の作成を依頼し、報告をもらっている。記録がないと元の状態に戻せなくなるため、記録は永年保存としている。

(委員) 資料6ページに貸し出し作品とあるが、館から作品を貸し出しするにあたって、代金をいただくことはあるのか。

(事務局) 公立美術館間の貸し借りは基本的に無料となっている。

(委員) では、全国いろいろな館から作品を集めることも可能なのか。

(委員) 賃借料はかからなくても、輸送費や保険料などの費用は膨大にかかる。

(事務局) 作品を借りるためには事前の調査も必要となり、都内でも1日に何件も回ることはできない。当館は都心から離れているので、調査に来るには半日から1日がかかりとなってしまうため、なかなか貸し出し件数は伸びない状況にある。

(委員) アンケートの回収率が1.4%という数字は低いと感じる。今後、この美術館に期待することを来館者に伺うとか、ニーズを把握することは企業などでも行われており、そういった項目があってもよいのではないか。回収率を上げる取り組みとして、喫茶店と提携して回答者に割引を行うなどはどうか。アンケート内容が例年同様であるならば、回答用紙の内容について見直しをしてもよいのでは。

(事務局) 内容については数年前に見直しを行い、個人情報の順番や項目も少し見直しを行った。割引等を付けることは、他館で新聞社のからんだ大規模展では過去に行われていたが、それによって回答に偏りが出てしまうということがあり、現在は行われていない。アンケート回答は、任意のものであるため、強制することはしていないが、記入いただいた方のご意見については、随時対応しており、キャプションが小さいというご意見には、大きいキャプションケースを今年度購入し、次回展示から使用する予定となっている。

(委員) 来館回数について、「初めて」が一番多く38.6%、次いで「6回以上」が35.0%となっている。その間が少ないのは、リピーターにはならないということなのか。

(事務局) 初めて来られる方は、特別展に関心のある方やビエンナーレに

知人が出展しているのだからという方が多く、また遠方から来られる方が多くみられる。「2～5回」の方が「6回以上」に到達できるかというところもあるが、かんぽの宿に定期的に宿泊される方が、その都度来ていただいているということもあるのではないか。

(委員) 65歳以上の方が多いの、やはり観覧料が無料になるからか。

(事務局) その傾向が強い。特別展開催時には、市内からバスで行くためにはどうすればよいかという問い合わせが多くあり、シルバーパスを活用して来館される市民の割合は多いと考えられる。

(事務局) アンケートの意見とその対応については、掲示を行うなど活用状況をお知らせするなど検討していきたい。

5 その他

(事務局) この美術館は、青梅市立美術館条例により、当館の名前は青梅市立美術館と小島善太郎美術館の連名となっている。小島作品の取扱いについては考えていかなければならない。

現在、小学校造形作品展の際には、小中学生やその家族が多く来館しているが、その時だけでなく、通常の企画展や特別展開催時の来館者数をどう増やしていくかが課題である。時々クラス単位でバスを使って来館することもあるが、そういったことや近隣の学校ならば担任の先生と一緒に徒歩で来るなど、子供たちが美術館に来る機会を増やしていきたいと考えている。

収蔵作品については、10年以上新たな作品の購入が途絶えており、限られた作品の中で工夫しながら展示会を行っている。今年の特展・谷内六郎展では作品のサイズが小さいため、まとめて多数の作品を借用することができた。一昨年には湯河原町との交換展を行ったが、準備には2年3年という時間が必要となる。作品のレベルが同程度にならないと交換展というものにはならないが、またご縁があればそういったことも行っていきたい。

今後ともいろいろなご指摘をいただきながら進めてまいりたい。

(事務局) 次回の運営委員会の日程については、平成30年2月初旬を予定。1月中には日程調整を行う。

閉 会